

日本語テキストの結束性から考える 英日翻訳における望ましい視点の取り方、視線の向け方

香取芳和
翻訳者

Abstract

This paper attempts to demonstrate how a change of subjects within or across sentence boundaries in English texts can be a threat to the cohesion of their Japanese translations and explores strategies that skilled translators employ to reduce it. To do so, it first examines the way cohesion is achieved in Japanese text, contrasts it with cohesion in English and tries to establish that different degrees of subjectivity with which speakers (or writers) of the two languages tend to construe a particular entity or situation are the ultimate cause of such a threat.

1. はじめに

筆者（香取）が講師を務める翻訳講座で最近紹介したある文章^{さくほう}作法の本に、以下の記述がある。

中止法で主語が変わるときは、注意を要する。ねじれ文といわれるものの多くは、中止法にあるとあってよい。「アリアン人の妻が自分の名前で、貸し出し図書館を利用し、そしてゲシュタポがそのような書物を一冊われわれのもとに見つけると、うまくいっても殴られる」は、翻訳文である。「妻が～利用し」、「ゲシュタポが……見つけると」と主語が変わったため、落ち着かぬものを感じられる。原文に忠実な訳文であろうが、「利用した」と終止形で結んだほうが、素直な感じになる。『ゲシュタポに……見つかる』という構文にすると、『うまくいっても殴られる』と、きれいに照応するが、翻訳の枠を超えたことになるのかもしれない

（尾川正二『原稿の書き方』 p119、下線＝尾川、傍点＝香取）

本稿はこの記述を起点に、尾川の指摘する問題が英日翻訳で起きやすい事情、「落ち着かぬものを感じられる」、つまり、文章の結束性が乱される理由を探り、さらに、尾川の提起した文章手直しが「翻訳の枠を超えたことになる」のかどうかを、Alice's Adventures in wonderland 日本語訳を通じて考察したい。同書を題材に選んだのは、Halliday & Hasan が英語の結束性を分析するに当たってたびたび引用しているため、英日間の比較を行いやすい

からである。

2. 結束性の分析

2.1. 英語テキストの結束性

英語テキストに結束性をもたらす要素（結束装置）を reference, substitution, ellipsis, conjunction, lexical cohesion の 5 項目に分けた Halliday & Hasan (1975)は、Alice's Adventure in Wonderland を題材に次のような結束性分析を行っている。

The Cat only grinned when it saw Alice.

“Come, it's pleased so far,” thought Alice, and she went on.

“Would you tell me, please, which way I ought to go from here?”

“That depends a good deal on where you want to get to,” said the Cat.

“I don't much care where—“ said Alice.

“Then it doesn't matter which way you go,” said the Cat.

“—so long as I get somewhere,” Alice added as an explanation.

“Oh, you're sure to do that,” said the Cat, “if you only walk long enough.”

Halliday & Hasan (1975) による結束性の分析：

最終行の “do that” は動詞 “get somewhere” の substitution として現れる。さらに “get somewhere” (7 行目) は “where you want to get to” (4 行目)、延いては “which way I ought to go” (3 行目) と lexical な結束性でつながっている。“oh” (最終行) は、the Cat の答えを、それに先行する Alice の発話とつなげる conjunction であり、同様に、the Cat による解釈 (6 行目) は、then という conjunction の使用によって “I don't much care where—” とつながっている。elliptical な形で現れる where は I get to を前提としており、I don't much care は want と lexical cohesion を実現している。“that depends” の that は reference item であり、直前の Alice の発言全体を指している。Alice の最初の発話に現れる it は the Cat に言及する reference item である。さらに、Alice、the Cat という固有名詞が繰り返されることで、第 1 文まで反復による結束チェーンが形成されている。

(M.A.K. Halliday & Ruqaiya Hasan, *Cohesion in English*, p.30)

2.2 日本語テキストの結束性

2.2.1. 言語化されている結束装置

上掲のテキストは、以下のように日本語に翻訳されている。

ネコはアリスを見てにんまりわらったきりだ。

「よかった、いまのところは大丈夫そう」アリスはそう思って、さきをつづけ、

「あのう、わたくし、ここからどの道を行けばいいか、教えていただきたいんですけど」

「そりゃ、あんたがどこへ行きたいかによるわな」とネコのこたえだ。

「どこだっていいんですけど——」

「そんなら、どの道だっにかまわんだろ」

「——どっかへ行きつけさえすればね」アリスがいいそえると、ネコはネコで、

「あ、そりゃ行きつけらあ。ちゃんと歩きつづけて行きさえすりゃあね」

(矢川澄子訳『不思議の国のアリス』pp.88-89)

ネコの最後の発話に現れる「行きさえすりゃあね」は、反復によって、直前のアリスの発話「行きさえすれば」と **lexical cohesion** を形成する。「あ、そりゃ」は、ネコの答えを、それに先行するアリスの発話とつなげる **conjunction** となっている。「そんなら」は、このネコの発話を直前のアリスの発話「どこだっていいんですけど」につなげる **conjunction** であり、「どこだっていい」は「どこに行ったっていい」の省略形。さらに「どこだっていい」の「いい」と、「行きたい」の「たい」は **lexical cohesion** を作っている。ネコの発話に現れる「そりゃ」は、直前のアリスの発話全体を受ける **reference item** である。

表面的には、原文の結束装置と訳文の結束装置の違いは以下の通りである。

- 1) 原文にあって、the Cat の **reference item** となっている “it’s pleased so far” の it が、訳文には現れていない。
- 2) 固有名詞「ネコ」と「アリス」の反復使用が形成する結束チェーンは日本語でも同様だが、英語テキストで the Cat と Alice がそれぞれ 4 回生起するのに対し、日本語テキストでは、「ネコはネコで」を 1 回と数えれば、どちらも 3 回。
- 3) さらに原文では、重文 “Come, it’s pleased so far,” thought Alice, and she went on. の she が 2 つの節を結ぶ **reference item** として機能しているが、日本語テキストでは訳されていない。

しかし以上の違いを持って、「日本語テキストは英語テキストより結束性が弱い」という結論を導くことはできない。日本語テキストには、英語テキストにはない結束装置が働いているからである。その 1 つは、「アリス」、「ネコ」それぞれの文体である。「教えていただきたいんですけど」と「どこだっていいんですけど」では、ネコの機嫌を損ねないようにとの気遣いをうかがわせる丁寧語の使用により、発話者がアリスであることが示唆されている。記号論の術語で言えば、この丁寧語の使用は、発話者を暗示する指標記号として働いているのである。だからこそ、文体の異なるアリス 3 度目の発話（「——どっかへ行きつけさえすればね」）についてのみ、訳者は発話者を明示する必要があるであろう。発話は通常交互に行われるという規則性以外に、これがアリスの発話であることを示す指標記号がないのである。

同時に、この 2 つの発話の語尾「いんですけど」は、反復による **lexical cohesion** ともなっ

ている。やはり記号論で言うなら、類似性に基づく類像記号として働いているのだ。

2.2.2 theme または rheme の非明示的な受け継ぎ

では、原文テキストで第1文と第2文をつなぐ役割を担っている reference item の“it” が訳されていない点についてはどうだろうか。

(1) ネコはアリスを見てにんまりわらったきりだ。

「よかった、いまのところは大丈夫そう」アリスはそう思って、…… (矢川訳)

(1)で結束性の源泉となっているのは、一見して第1文、第2文に共通して現れる固有名詞「アリス」だけである。誰(何)が「いまのところは大丈夫そう」なのかは明示されていない。にもかかわらず、読み手には、それがアリスによるネコの心理状態の推察であることが疑いようもなく伝わる。なぜか。「日本語テキストでは、前文の主題を引き継いでいる場合には、文法的に主題は省略可能である。前文の主題『ネコは』は省略できる」という説明もあり得るだろう。しかし後に2.2.3で論ずるように、単に「文法的に省略可能」というだけでは事情があるのは、省略が無かった場合と比べてみれば明らかである。

(2) ネコはアリスを見てにんまりわらったきりだ。

「よかった、ネコはいまのところ大丈夫そう」

(1)と(2)を比べてどちらに強い結束性が感じられるだろうか。明らかに、(1)である。省略した方が、省略しない場合より強い結束性が感じられる。日本語のテキストでは、もともと主題の非明示的な受け継ぎが結束性の維持に重要な役割を担っているのである。だから、第1文で「ネコは」と主題を導入した直後に、再度、係助詞「は」で主題を導入することは、たとえ同一の主題(この場合「ネコ」)であったとしても、テキストの結束性を弱めてしまう。日本語では「話し手の目に映る話材を自己との関係としてとらえ、話材をいちいち『～は』と表さない。(中略)話材の姿・様子を話者が、ただ『何だ』『どんなだ』と受け止めて言葉に出す、それが自然な日本語」(森田、1995、p.13)だからである。これは文芸作品に限った現象ではない。

Diagnosed with Stargardt's Disease as a child, Marla Runyon has been legally blind for more than 20 years. Marla ran the 1500-meter race at the Sydney Summer Olympics in 2000 to finish eighth, while becoming the first Paralympian to compete in the Olympics. She now has long distance aspirations. In the 2002 New York City Marathon, Marla finished fifth among the fastest runners in the world with a time of 2:27:10.

(“Victory by and for the Disabled,” *Sports in America*, An electric journal of the U.S. Department of State, Volume 8, Number 2, December 2003)

子どもの頃にスタルガルト病と診断されたマーラ・ランヨンは、20年以上も前から法律上盲目の認定を受けている。(ランヨンは)2000年にシドニーで開催された夏季オリンピック大会で1,500メートル競走に出場し8位の成績を収めると同時に、オリンピックに出場した最初のパラリンピック選手になった。(ランヨンは)今は長距離を目指している。2002年のニューヨーク・シティマラソンでは、(ランヨンは)世界の強豪と走って5位でゴールした。タイムは2時間27分10秒だった。

訳文中カッコに入れた「ランヨンは」を生かすと、テキストの結束性はむしろ弱まってしまう。ないほうが、テキストのまとまり感を保つことができるのである。

さらに、省略して差し支えない、もしくは省略が結束性をむしろ高めるのは、先行する文の中で係助詞「は」を伴って導入された主題を受け継ぐ場合とも限らない。例えば、上掲のテキストで、...while becoming the first Paralympian to compete in the Olympicsに続く文が、以下のように書かれていたとしたらどうだろうか。

The feat greatly helped change U.S. public attitudes on athletes with disabilities.

やはり原文の主語を訳出せず、

「障害を持つスポーツ選手に対する米国民の見方を変えるうえで、大きな役割を果たした出来事である」

としてまったく違和感がない。つまり、前文で非明示となっている主題(「ランヨン」)、または、前文で加えられた新情報の中心概念(「健常者と対等に競い合った」)を主題として引き継ぐのであれば、文章展開に無理がないということである。これは英語の代名詞が、直前の動詞の主語か目的語のほうが、例えば前置詞の目的語よりも先行詞にしやすい(Cook 1985)のと相通じる。単文を連ねた最もシンプルなテキストを想定すれば、直前の動詞の主語になりやすいのは前文の theme の中心となる名詞句であり、目的語になりやすいのは前文の rheme の中心となる名詞句である。このことは、英語でも日本語でも、theme または rheme のどちらかを後続文で発展させていくのが自然な文章展開であることの一つの証拠といえるだろう。中山(1998)の言葉を借りれば、「文と文のつながりという角度から見れば、言語間にそれほど大きな差異はなく、むしろ共通の基盤によっている。(中略)文章の進行は、その文法的な側面に限っていうと、おもに主題の受け継ぎか、または述語の論理的展開という形をとるが、日本語において主題の受け継ぎの基底をなすのは代喩的および換喩的原理である。この点は代名詞を多用する英語などいくぶん違っているが、主題の展開というレベルで見ると、日本語においてもヨーロッパの諸言語について指摘されているものとまったく変わらない」(p.145)ということになる。受け継ぎが行われる際、英語では文頭(付近)で代名詞が使われ、日本語では係助詞「は」を使って明示しようと思えばでき

る主題が非明示となり、それぞれある種の結束装置として機能する。

ここまですべてをまとめると、日本語の場合、前文の旧情報または新情報の中心概念を、後続文が主題として非明示的に受け継いでいく展開がテキスト結束性の一つの源となっていると言える。

結束性の研究では、テキストに言語化された結束装置だけを問題にしてもあまり意味のある分析にならない。テキスト展開が内容的に聞き手（読み手）の期待通りなのか、そうでないかを考慮に入れる必要があるだろう（Katori 1996）。期待通りの展開であるならば、結束装置は弱いものでよい。そうでなければ強い結束装置——例えば、「不適格な結合を適格なものに変えたり結束性を新たに作り出したりする」（中山 1998, p.128）ことのできる *conjunction* を使うなり、*lexical item* にしても類語や換喩ではなく同一語彙を使うなりして——を用いることになる。

ところで、本稿では深入りしないが、日本語テキストの主題省略は Halliday & Hasan の言う *ellipsis* とは性質が多少異なる。英語の *ellipsis* が起こるのは、基本的に同一語（句）が統語上の規則に従って反復される場合に限られるが、日本語で旧情報が非明示になる状況は上述の通り英語とは異なるうえに、非明示にできる条件も緩やかである。日本語のテキスト結束性の分析に Halliday & Hasan の結束装置の分類を無理やり当てはめる必要はないだろう。

2.2.3 一貫した主観的事態把握

日本語訳『不思議の国のアリス』の結束性に寄与している重要な要素がもう一つある。主人公アリスの目に映ったままを描くという語り口、視点の取り方そのものである。(1) は、アリスが見て取ったネコの様子である。アリスの目には「にんまり」とわらったネコが見えており、そこにアリスの注意が向いている。この状況で、

「よかった、いまのところは大丈夫そう」

とアリスが心の中で思うとき、いったい「『何が』大丈夫そう」なのかは、読み手にとって疑問の生じる余地がまったくない。物語の語り手は「主人公の眼を通して情景を描き、かつ、語っている — つまり、語り手は作品の主人公と一心同体化してしまっているわけである。そこへ読み手が加わるとどうなるか。読み手も主人公の眼を通して情景に接し、それを主人公と同じように感じることで、読み手自身もまるで自分が主人公と一体化して、主人公と同じ体験をしているかのような思いを抱いてしまう」（池上 2002, p83）のである。

このように、2.2.2. でみた *theme*、*rheme* の非明示的な受け継ぎそのものが主観的な事態把握の必然的な結果といえるが、主観性はそこにとどまらず、読み手と主人公アリスの一体化という現象を通じてテキストの結束性を支えている。以下の文で特に顕著である。

- (3) When the procession came opposite to Alice, they all stopped and looked at her, and the Queen said, severely, “Who is this?” She said it to the Knave of Hearts, who only bowed and smiled in reply. (下線=香取)

行列はアリスの真正面までくると、いっせいに立ちどまり、じろじろこっちを見つめてね。女王さまが、「何者です？」ってきびしい声でたずねる。きかれたのはハートのジャックだけれど、こいつはただ頭をさげてにっこりしただけだ。(下線=香取)

意義深いのは、下線部を「こっちを見つめて」と訳すことにより、読み手をアリスと一体化させている点である。コ系の指示語は、話し手と聞き手が一体感意識で共に対象と向き合うときに使われる(森田 1994) のであり、この部分を「じろじろアリスを見つめてね」と訳してしまえば、同じような語り手・読み手の一体感は作れない。

そのほか主観的な視点が顕著に出る文を数例挙げる。

- (4) “I wish you wouldn’t squeeze so,” said the Dormouse, who was sitting next to her. “I can hardly breathe.” (下線=香取)

「そんなに押さないでよ」と、となりにすわっていたネムリネズミがいいだした、「息がつかないよ」(下線=香取)

- (5) She was a little nervous about it, just at first, the two creatures got so close to her, one on each side, and opened their eyes and mouths so very wide; but she gained courage as she went on. (下線=香取)

はじめのうちはおっかなびっくり、というのは、二ひきが両側からにじりよってきて、目も口もぼかんとあけてききいっていたからだけど、そのうちだんだん勇気がでてきてね。(下線=香取)

- (6) “It’s—it’s a very fine day!” said a timid voice at her side. She was walking by the White Rabbit, who was peeping anxiously into her face. (下線=香取)

「きょうは、—ええと、きょうはいい天気ですなあ」そばでおどおどした声をする。みるとあの白ウサギがならんで歩いていて、そいつが心配そうにアリスの顔をのぞきこんでいたんだよ。(下線=香取)

以上 (4) (5) (6) の訳文では、Langacker の言う主観化が見られる。Langacker (2002) は以下の例文で主観化の程度を説明している。

- a. Vanessa is sitting across the table from me.
b. Vanessa is sitting across the table.

(Langacker, R. W., 2002, *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, p. 328.)

a.では話し手自身が参照点として言語化されているのに対し、b.では、本来客体となる事態の中に話し手自身が入り込んでしまっているという意味で、主観化が起きているというのだ。確かに話し手自身が観察の対象となるべき事態の一部になってしまえば、自分の姿は見えなくなる。よって言語化されない。(4) (5) では to her を訳出しないことにより、訳文は原文より主観化の程度を高めている。その操作は、(6) にいたってさらに顕著である。at her side の her が訳されていないのは (4) (5) にも共通する主観化だが、ここではさらに進んで、後続文が伝える事態も、アリスの自己中心的な視点で把握されている。原文は「アリスが白ウサギと並んで歩いていた」と両者を客体として外から、Langacker の言葉で言えば offstage から眺めているのだが、訳文は「白ウサギが並んで歩いていた」とアリス側から眺めているばかりか、her を訳出しないことで主観化の程度を強めている。(6) の原文では代名詞 she (her)がこの2つの文をつなぐ結束装置となっているのに対し、訳文ではまさに、その結束装置を省くことにより、つまり主観的な事態把握に変換することにより、まとまり感のあるテキストを作り出しているのである。

自己中心的な視点の取り方が読み手を主人公と一体化させテキストの結束性に寄与している例は枚挙に暇がないが、分かりやすい例をあと2点挙げておく。

“Poor little thing!” said Alice, in a coaxing tone, and she tried hard to whistle to it; but she was terribly frightened all the time at the thought that it might be hungry, in which case, it would be very likely to eat her up in spite of all her coaxing. (it = a dog、香取注)

「かわいいワンちゃん！」アリスはごきげんとるみたいにそういつて、なんとか口笛ふいてみようとしてね。でもそのあいだ中、相手がおなかをすかせてやしないかと思っ**てびくびくもの**だった。そしたらいくらご機嫌とったってぺろりと平らげられるのがおちだ。(下線=香取)

Alice could hear him sighing as if his heart would break. She pitied him deeply.

まるで胸もはりさけそうなためいきをついているのが、アリスにもきこえてきた。こっちはしんからあわれをそそられてね。(下線=香取)

2.2.4 注意対象の変転の回避または緩和

主人公と読み手が一体化しているとなれば当然、読み手の視線の向く先を急変させない努力が必要となる。読み手の視線がなるべくぶれないようにとの配慮が随所でテキストの結束性を高めている点にも注目しておきたい。

“Give your evidence,” said the King; “and don’t be nervous, or I’ll have you executed on the

spot.”

This did not seem to encourage the witness at all: he kept shifting from one foot to the other, looking uneasily at the Queen, and in his confusion he bit a large piece out of his teacup instead of the bread-and-butter.

「証拠をあげよ。そんなにびくびくするな」と王さまの仰せだ、「さもないと、この場で刑に処す」

そういわれたって証人、元気がでるわけじゃない。両足をしきりにもぞもぞさせては、おどおどと女王さまの顔色をうかがっていたけれど、よっぽどあわてたか、バターつきパンの代わりに茶わんをがぶり、かじりとってしまった。(下線=香取)

「そういわれたって」と受け身で訳すことによって「証人」を話題の中心に据え、それを後続の文で主題として受け継ぐ。先行文とのつながりを作る指示語「そう」の使用と相俟って、この受け身は読み手の視線を the King から the witness へと滑らかに移動させている。説明は省くが、次の文でも同様の工夫が見られる。

The Queen said, severely, “Who is this?” She said it to the Knave of Hearts, who only bowed and smiled in reply.

女王さまが、「何者です？」ってきびしい声でたずねる。きかれたのはハートのジャックだけれど、こいつはただ頭をさげてにっこりしただけだ。(下線=香取)

次の例では、文を Bill 中心にまとめており、本来 were giving の主語である two guinea-pigs は斜格(「〜に」)で導入するにとどめている。two guinea-pigs が読み手の注意を奪ってしまうと結束性が乱されるためである。

- (7) The poor little Lizard, Bill, was in the middle, being held up by two guinea-pigs, who were giving it something out of a bottle.

まんなかにはあわれなトカゲのビルが、二ひきのモルモットに支えられて、びんから何かのませてもらっているとこだ。(下線=香取)

- (7) の手法が使えない場合、次のような工夫が随所に見られる。

- (8) “Get to your places!” shouted the Queen in a voice of thunder, and people began running about in all directions, tumbling up against each other.

「位置につけーい！」女王さまが雷みたいな声でどなったので、みんなはいっせいに、もつれあいながら、四方八方へかけだしていった。(下線=香取)

- (8) の原文では等位接続詞 and によって2つの節が並置されている。よって the Queen と

people を対等に扱ったほうが文法上は理に適うが、訳者は重文の主語の一方を主題として「は」で取り立て、もう一方の主語を格下げして格助詞「が」で処理している。2つの主題を対比させる文（「おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」）を例外として、1つの文中に2つの「～は」は共存しづらい。そこで修飾句の中に位置することになる初めの「は」は「が」に替わる（森田 1992, 1995）。文法的にはそのように説明できるが、興味深いのは、たとえ文を2つに分けたとしても（「女王さまは雷みたいな声でどなった。みんなはいっせいに～」）、やはり落ち着きのなさが残る点である。（逆にスピード感を出すには効果的であろうが）。読み手としては、短時間で「女王さま」から「みんな」に視線を転じることに忙しなさを感じるのであろう。

次の(9)では、その落ち着きのなさを解消するため、重文を2つに分けたうえで、論理的に結束性を維持するための接続詞（「おかげで」）を補っている。主題をアリスからトカゲに移すにあたって、「おかげで」に連結役を担わせているのである。

- (9) Alice looked at the jury-box, and saw that, in her haste, she had put the Lizard in head downwards, and the poor little thing was waving its tail about in a melancholy way, being quite unable to move.

アリスは陪審席を見ると、なんと、いそいはずみにトカゲをさかさまに入れちゃったんだね。おかげでちびさん、かわいそいうに身動きもならず、かなしそうにしっぽをぱたぱたやっている。（下線＝香取）

3. まとめ

以上見てきた訳者の工夫が、訳文の結束力を強め文章を読みやすくしていることは議論の余地がない。その効果は、操作が行われなかった場合の文を想定してそれぞれ比較してみれば明らかである。

しかしそもそもなぜ、こうした操作が有効なのだろうか。つまるところ、主節であろうが従属節であろうがすべての動詞について主語の明示が義務的である英語と、前文の theme または rheme の非明示的な受け継ぎが結束性の基本となっている日本語の違い、観察対象から離れた位置に視点を取りそこから客観的に事態を把握し叙述するのを基本とする言語と、「傍観者の目ではなく、自らを舞台にのぼせて、己と対象との相関の図式において現象をとらえようとする」（森田 1999, p.158）言語との違いに帰することができるのではないだろうか。つまり、動詞の主語として読み手の注意を引く客体が短い間に二転三転する状況には、英語話者のほうが、日本語話者より容易に対応できるということである。言い方を変えれば、主語・主題の変化は、日本語テキストの結束性にとって、英語テキストのそれ以上に大きな脅威となり得るのだ。

Virginia Lee BurtonのThe Little Houseと、その翻訳『ちいさいおうち』（石井桃子訳）の結

束装置を比較した青木（2008）¹は、以下のくだりて原文にない接続詞が足されている点に着目した。

（原文）

She watched the children
coasting and skating.

Year followed year ...

The apple trees grew old
and new ones were planted.

The children grew up and went away to the city

（Virginia Lee Burton, *The Little House*, p.12.）

（注：第1文の she は the Little House を指す。香取）

（翻訳）

こどもたちは、そりに
のったり、すけーとを したりしました。

くるとしも、くるとしも.....

やがて りんごの木は としをとり、

あたらしいのに うえかえられました。

そして こどもたちも おおきくなって、

まちへ でていきました.....

（石井桃子訳『ちいさいおうち』、下線＝香取）

結束装置はなぜ足されたのか。原文の *the apple trees*、*the children* に現れる *the* の役割は、訳文では、旧情報を導入する係助詞「は」が担っており、ここに大きな違いがあるとは思えない。筆者（香取）の見るところ、訳者は、連続する4文の主語がすべて異なるうえに、文から文へと *rheme* の受け継ぎも行われぬこの状況は日本語テキストの結束性にとって脅威になると直感したのであろう。「やがて」「そして」はその脅威を減らすための措置といえる。小説家の井上ひさしは、文と文の間に感じられるギャップを「文間の余白」と呼び、特に原民話を児童向けに書き直す際にはこれを接続言で埋めてはならないと主張する（1984）。余白を埋める行為は、読み手である子どもから読書の楽しみを奪ってしまうという考えである。この主張の妥当性は本稿で扱える範囲を超えるが、ただ、上掲の日本語テキストで「やがて」「そして」がもしなかったら、文章展開が唐突に感じられるということ自体は論を待たないだろう。

¹ 青木珠恵（2008.9）『絵本の英日翻訳における結束構造の考察』。第9回日本通訳学会年次大会口頭発表、於・獨協大学。

英語テキストにとっても結束性の揺らぐ場面ではあるだろう。しかし、繰り返しになるが、程度の問題である。日本語という「話し手が問題の場面に自らの身を置き、体験の場の(いま、ここ)に視座を捉えて自らの(こころ)に浮かんだことを語る」(池上 2003、p.12)言語においては、目の前に展開する事態を生々しく伝えることができる一方、英語においてほど容易に場面の切り替えができないのである。この事情は、前出の森田、池上、Langackerほか多くの言語学者がするように観劇にたとえると実に上手く説明がつく。事態把握の主体としての話者を観客に見立て舞台上の客体との位置関係を論じるものだが、こう言えるのではないだろうか。英語では、観客は基本的に客席にいて遠くの舞台を眺めている。この者がひとりの役者から別の役者へと注意を転じるには、瞳をわずかに動かせばよい。しかし日本語では、観客自らが舞台上に上り、そこで展開する場面の一部となる。この者が注目の対象を変えるには、顔ごと向きを変えなくてはならない。至近距離の観察に伴うコストである。顔ごと向きを変えるのにかかる労力(コスト)が、(9)では「おかげで」というかたちで言語化され、『ちいさいおうち』の訳文では「やがて」「そして」というかたちをとってテキストに現れているのである。

ここで冒頭の疑問提起に戻るが、「ゲシュタポが…見つけると」を「ゲシュタポに…見つかると」に変えて訳すことは許されるだろうか。(7)と同じ操作をすることになるが、英日それぞれの言語の特性を考慮し目標テキストの読みやすさを重視する現代の翻訳規範に従うならば、まったく問題ない。童話・小説とノンフィクションは違うとの指摘があるかもしれないが、程度の差こそあれ、日本語では新聞の社説でさえ主観的な視点を持っている。その一つの証拠として、日本語の新聞社説では時間への言及も「昨年」「先月」といった、(いま、ここ)を参照点とする表現が目立つ。Langacker (2002) の言う「直接スコープ」に至る前の主観化である。ついでながら、これらが英訳されるときは、例えば“in April 2005”のように絶対的な表現に変えられる場合が多く見られる(Katori 2005) ことも付け加えておこう。

以下の3例ではすべて、a.の訳よりも、注意対象の変化を回避したb.の訳を奨励したい。

It is also difficult at times to distinguish child trafficking from legitimate adoption; the difference may be clear conceptually, but it is not always clear in reality. An American agency that helped bring 600 Russian children to the United States in the 1990s admitted giving orphanages clothing and medical supplies in order to establish preferential relationships with them. But the agency claimed that because it did not pay the orphanages, the Russians had not been "selling the children."

(Ethan B. Kapstein, Kapstein, E. B (2003) *The Baby Trade Foreign Affairs*, Vol. 83, pp.115-125. 下線=香取)

- a. この業者は、孤児院には金銭を支払っていないのだから、ロシア人が「子どもを売った」のではないと主張した。
- b. この業者は、孤児院には金銭を支払っていないのだから、ロシア人に「子どもを売

ってもらった」のではないと主張した。

Language learning played an important role in pupils' experiences. Hornsey [School for Girls] introduced pupils to Spanish, which enabled them to start comparing their lives with their peers in a Spanish-speaking country.

(Qualifications and Curriculum Authority. (2007) *The global dimension in action: A curriculum planning guide for schools*, p.38. 下線＝香取)

- a. ホーンシー女子校は、生徒をスペイン語に触れさせた。生徒たちは習ったスペイン語を使ってスペイン語圏の国の子どもたちと自分たちの暮らしを比べ始めた。
- b. 学校でスペイン語の手ほどきを受けたホーンシー女子校の生徒たちは、スペイン語圏の国の子どもたちと自分たちの暮らしを比べ始めた。

In 2006, Chopwell [Primary School] contacted the British Council, which suggested they work with the educational charity Japan 21 to create a link with a Japanese school.

(Qualifications and Curriculum Authority. (2007) *The global dimension in action: A curriculum planning guide for schools*, p.28. 下線＝香取)

- a. 2006年、チョップウェル小学校はブリティッシュ・カウンシルに接触した。ブリティッシュ・カウンシルは同校に、教育チャリティである「ジャパン21」と協議して日本の学校とリンクを作ることを勧めた。
- b. 2006年、チョップウェル小学校はブリティッシュ・カウンシルに接触した。そして、教育チャリティである「ジャパン21」と協議して日本の学校とリンクを作ることを勧められた。

英語から日本語にしる、日本語から英語にしる、翻訳はテキストの結束性を危険にさらすプロセスである。英日翻訳における視点の取り方、視線の向け方は、語順の問題と同様、訳文テキストの結束性を大いに左右する要素なのだ。翻訳者の技量が試される。

筆者紹介：香取芳和 (KATORI Yoshikazu) 翻訳者、講師。2008年、翻訳者としての主な仕事は The Long Campaign (アメリカ大使館) The global dimension in action (ブリティッシュ・カウンシル) Darfur Update (国境なき医師団)。以上和訳。「留学生のためのキャンパスガイド」(明治大学)、学会プレゼン資料(早稲田大学)。以上英訳。(カッコ内は発注者)。また、大手翻訳エージェント2社の在宅翻訳者採用試験の審査を担当している。立教大学大学院博士課程前期修了(異文化コミュニケーション学)。

連絡先：katori.ws@nifty.com

【使用データ】

- バージニア・L. V. (1954) 『ちいさいおうち』 (石井桃子訳) 岩波書店
- Burton, V. L. (1942). *The Little House*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- キャロル, L. (1994) 『不思議の国のアリス』 (矢川澄子訳) 新潮文庫
- Carroll, L. (1988). *Alice's Adventures in Wonderland*. 講談社インターナショナル
- Greenwald, S. (2003). Victory by and for the Disabled, *Sports in America*, An electric journal of the U.S. Department of State, Volume 8, Number 2, December 2003
- Kapstein, E. B. (2003). The Baby Trade *Foreign Affairs*, Vol. 83, pp.115-125. New York: Council on Foreign Relations.
- Qualifications and Curriculum Authority. (2007). *The global dimension in action: A curriculum planning guide for schools*. pp. 28 & 38.

【参考文献】

- Cook, C.K. (1985). *The MLA's Line by Line: How to Edit Your Own Writing*. Boston: Houghton Mifflin Company.
- Halliday, M.A.K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- 池上嘉彦 (2002) 『記号論への招待』 岩波書店
- 池上嘉彦 (2003) 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(1)」 山梨正明ほか (編) 『認知言語学論考』 (1-49 頁) ひつじ書房
- 井上ひさし (1987) 『自家製 文章読本』 新潮文庫
- Katori, Y. (2005). Master's thesis *A Gricean Analysis of Journalistic Texts in Translation Between Japanese and English*. Unpublished.
- Katori, Y. (2006). *Translating Cohesion in Journalistic Texts, between Japanese and English*. 『通訳研究』 No. 6.
- Langacker, R.W. (2002). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 森田良行 (1988) 『日本語の類意表現』 創拓社
- 森田良行 (1995) 『日本語の視点：ことばを創る日本人の発想』 創拓社
- 森田良行 (1998) 『日本人の発想、日本語の表現：「私」の立場がことばを決める』 中公新書
- 尾川正二 (1976) 『原稿の書き方』 講談社現代新書
- 山中桂一 (1998) 『日本語のかたち：対照言語学からのアプローチ』 東京大学出版会